

不便と不幸の間

私は、現在、社会福祉事業団というところで障がい者の自立を支援する施設の運営を行っています。その中の一つに「福祉村」という施設があり、脳性まひなどの重度の身体障がい者の方々を、お一人お一人の適正・能力にあった生活や活動を確保しながら、様々な支援を行っています。

この「福祉村」に入所し車椅子で生活しているSさんは、自分より障がいの重いMさんが頑張っている姿を見て、次のような一文を残しています。

「人間として大切なことは、歩けるか、歩けないか、障がいが軽いか、重いのか。施設で生活しているか、街で生活しているかではなく、その人がどれだけ人間として生きていけるか。悔いない一日をどれだけ多く過ごせるか。自分の夢にどれだけ素直に向かっていけるかだと思う。(略)何も考えずに毎日をただ過ごしている人より、Mさんの方が人間らしい。」

また、彼は、自分は障がい者であるから、「生活をする上では不便ではあるけれども、決して不幸ではない」とも述べています。

今日、障がいのある人もない人も共に暮らす事のできる社会の創造は、大きな政策課題となっています。勿論、「バリアフリー」とか「ノーマライゼーションへ」という言葉自体は、社会の中に浸透してきたように思います。しかし、現実を見ると、理想とはほど遠いといわざるを得ません。

例えば、街中を見ると、至るところに段差がありますし、まだまだ障がい者の方々が気楽に出かけられる環境にはありません。

また、障がい者の方々が自立して生活しようとした場合には、働く場所や住むところの確保が難しいという現実と直面することになります。

こうした課題を克服して、ノーマライゼーション社会を創るにはどうすべきでしょうか。

一つは、人々の障がい者に対する理解を深めることが重要だと思っています。残念ながら、いまだに障がい者に対する偏見は消えておりません。こうした偏見をなくしていく上で、障がい者を支援している当事業団などの社会福祉法人

やNPO法人が果たす役割は大きいと思っています。

二つめは、企業側として、これまで以上にワークシェアについて考えていただきたいということです。既存の仕事を分解することによって、障がい者が活動できる分野の広がりが期待できます。また、ワークシェアがしやすい仕組みを作ることも重要です。

障がい者の自立支援を、「不幸な人を支えてあげよう」というような慈善の気持ちからスタートしたのでは、障がい者の自立を実現していくことは難しいと思われれます。障がいも一つの個性と考え、障がいのある人もない人も互いに足らざるところを補い合いながら社会を形成していく、そうした取り組みこそ、ノーマライゼーション社会を実現していくための第一歩です。

福祉村のSさんの「生活をする上では不便ではあるけれども、決して不幸ではない」という言葉を、改めて噛みしめてみたいものです。(塾頭 吉田 洋一)